

## (シンポジウム)

### ○司会

ただいまから、「犯罪被害者支援シンポジウム～いのちの大切さを語り継ぐまちづくり」を開催いたします。

本日は、多数のご参加をいただきました。

コーディネーターは、岡山県美作県民局と協働事業を行っておりますNPO法人おかやま犯罪被害者サポート・ファミリーズの川崎政宏弁護士が務めます。

サポート・ファミリーズは、平成17年2月に任意団体として設立され、平成18年6月からNPO法人として電話相談や自助グループの活動を中心に活動されています。川崎さんは、その代表として犯罪被害者支援に取り組んでおられます。

それではお願いします。

### ○コーディネーター（川崎政宏）

それでは、これからシンポジウムを始めます。

コーディネーターを務めます川崎政宏です。よろしくお願いたします。

今日のシンポジストを最初にご紹介したいと思います。

壇上の向かって左手から、高橋幸夫さん、市原千代子さん、田中唯一さん、佐々木裕子さん、平賀和治さんです。

高橋さんは、5年前妻の妙子さんが行方不明となり、過剰なメディア報道により、被疑者死亡のまま事件が未解決となっています。犯罪被害者当事者として、NPO法人おかやま犯罪被害者サポート・ファミリーズの副理事長として、遺族の分かち合いの場などにかかわっておられます。今日は被害当事者としてのお話をしていただきたいと思っております。

市原さんは、8年前に次男の圭司さんを少年ら3名による集団暴行により亡くされています。NPO法人理事として、犯罪被害者遺族が学校に出向いて、「子供たちを被害者にも加害者にもしないために」と題して、現在「命の

授業」にかかわっておられます。今日は当事者としてお話をさせていただきます。

田中さんは、津山警察署警務課の被害者支援係長として、高橋さんの支援を担当されています。警察の立場から被害者支援についてお話をさせていただきます。

佐々木さんは、津山市議会議員で、地域で子供たちの問題や環境問題、まちづくりなどの市民活動を行っておられ、今日は子供たちや地域の、現場からのお話をさせていただこうと思っております。

平賀さんは、岡山県教育庁指導課の総括副参事で、先日岡山県のいじめ対策行動推進会議がいじめ問題に対する新たな提言をまとめた際に、事務局としてかかわっておられます。子供たち、学校の現場でのお話を今日はさせていただこうと思っております。

それでは、今日は2時間半と長い時間ですが、皆さんお一人お一人と一緒に考えていただきたいと思っていますので、是非よろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、前半は、まず高橋さんの方から**犯罪被害者が置かれている現状**を知っていただくために、少し問題提起をしていただき、話を進めていきたいと思ひます。

後半は、被害者が置かれている現状を踏まえた上で、**地域でどういったことを一緒に考えていけるか**、を話し合いたいと思ひます。

まず、前半で、高橋さんからの問題提起として、当事者の立場からの体験とお話をさせていただこうと思ひます。

スライドを使いながらお話をさせていただきます。

#### ○シンポジスト（高橋幸夫）

どうも今日はお忙しい中をありがとうございます。

僕は、5年前に、もう5年ですかね、妻の妙子を拉致されて、いまだに帰ってきませんが、津山警察署の方で熱心に捜査していただいておりますけれど

も、解決しておりません。この5年間いろいろと悩みまして、僕自身、これから先どうなるのかな、そう思いながら過ごしましたが、今日こういうふう  
に皆さんの前でお話しすることができるぐらいのところまで何とか元気を取り  
戻しています。これもファミリーズの川崎先生を中心として、いろいろの  
サポートしていただきまして、津山警察署の田中さん、それから佐々木さん、  
市議会議員の佐々木さんに支えられて今日があるのだと思っております。

今日、問題提起という形でちょっと話させていただこうと思いますが、これ、  
この写真はですね、ちょうど妻がいなくなる前の1カ月前に新庄村の方、  
鳥取県との県境の毛無山がありますけどね、そこへ一緒に登ったときのその  
写真なんですよ、これ。これが、最後の最新の写真で、何か思い出深い写真  
です。何か語ってるのかなみたいな、何か・・・。

当たり前なことなんですけれども、亡くなった命はもう帰ってこないのよ  
って言っているような、そんな写真ですね。やっぱりこう命って大切だと思  
うんですね。それはもうわかり切ってるんですけれども、5年5カ月たって、  
やっぱり僕の前に顔を見せないということは、やっぱり何か、警察があ  
れだけ探してくれている、ダムの中まで探してくれている。亡くなった命  
というのは、やっぱり帰らないんじゃないの、当たり前なことなんです  
けれども、ひしひしと感じている。だから、これ1番目に書かせていただき  
ました。本当に亡くなった命は帰らないんだなあ。新聞の中では、何か調  
査がありましたですね、小学生の1、2割は、亡くなくても、また必ず命が  
生き返るとかというふうなのがありましたですね。あんなのびっくりしたん  
ですけれども、**本当に亡くなった命、命が亡くなって帰ることはない**とひしひしと感  
じております。

それから、2番目なんですけど、残された遺族というものは、そこから先、  
もう忽然と閉鎖されてしまうというんですか、次へのステップが出ない。  
また新しい道を、全く別の新しい道を探していかなければならない。こ  
ういうふうな悩みがずうっと続く、命がなくなるまで続く。僕が、子  
供たちが亡くなるまで続くんだということをひしひしと感じながら今  
生活しております。

ですから、簡単に、事件があったって、ああ済んだ、ああもうこれ忘れたというわけにはいきません。**遺族は、取り残された家族というものは、その家族が死ぬまでずっとその事件は続いているんだ**っていう、よくそこまで思いがはせられないと思うんですけども、僕まだ事件の中に立っていますね、ここに僕が死ぬまで事件の中にいなくちゃいけない、これをひしひしと感じております。今まで、僕事件に遭うまでは、新聞でその場をぱっと見て、ああそうかと思って、もう1年たったら忘れてるんですね。でも、そのご家族というものはそれで済まない。もし生きておられれば、僕と同じような悩みを持って過ごされとると僕は思うんですね。ですから、**事件というもの、事件・事故というものはその場限りではないんだ**っていうことを、いま一つ当たり前のことなんですけれども、再認識していただきたいですね。わかっていただきたいなって僕は思って、今日ここに立ってるんです。

それから、何でこんな悲しいことを続けなくちゃならないのかと。続けさせられている、こんなことがあっていいんだろうかと、僕はすごく怒りが大きい。この怒りっていうのはもう言葉ではあらわせない、もう自分が破綻するぐらい、でも、それを社会にぶつけたら、怪しい人間になるもんですから、じっとかみ殺して生きてる、これが僕なんですね。でも、この苦しみっていうのはですね、もうこれも一生続くことだろうと僕は思っています。だから、だからこそ僕はこんな苦しい思いを、皆さんに味わってほしくない、二度とこんなことにならない社会、そういうふうなことを望んで、僕ここに勇気を持って立っています。

原爆の被害者が被爆体験を語り継ぐという、その大切さっていうのを、僕は事件に遭う前までは、その意味がよくわからなかったんです。観念的にはわかるんですね。それは、ある体験を語り継いで戦争が起こらないようにと、必死になって戦争をやめと、その痛い気持ちを持って話されとったんだなということが、僕はこの事件があって初めてわかったんです、本当に。

じゃあ、話したからって妻が戻ってくるわけじゃありません。だって、やり直しはできないんですね。僕の人生はやり直しができません。同じように、

僕の体験を通じて、原爆被害者の方が、あれだけ熱心に被爆体験を話されている、その思いというものをひしひしとわかってきたんですね。

皆さんは、そういうふうな体験をされてはいけません、されたら終わりなんです。**やり直しができない。だから、そんなことが起こらない社会をつくってほしい**、そのために僕らファミリーズは語っておるんですね。今日、佐々木さんたちに来ていただいたのも、とにかくその体験の中を皆さんに、語っていただいて、皆さんにわかっていたいただきたいと、これが僕の必死の思いです。

じゃあ、そういうことで、やっぱり僕は**お互いに思いやりを持つ、これに尽きるのではないか。わかり合う、お互いにわかり合う、そのことにつきるんじゃないか**。そしたら、**相手のことを思えば、殺人はしないでしょし、いじめはないでしょし、自分が痛めつけられたらどう思うか、そういう立場になれば、痛めつけることはできないんですね**。そういうふうな思いやりの心がどうもこの今の社会ではなかなかできない、お互いに。僕はそういうに思うんです。

次に、僕は事件、2つの事件をともに受けたと思っております。一つは犯人。僕の女房を手にかけてですね、拉致した。これはすごく腹が立っているんです。これは第一次ですね。

次は、メディア。**メディアがあれだけスクラムを組んでやり、犯人に詰めにかからなかったならば、もう犯人は見つかったんですね**。あと二、三日待ってくれば、犯人捕まっと思ったんですね。それを、メディアがあれだけ入っていくし、メディアが殺したと思うと。これはOHKの岡山放送の小林君が自己反省のためにつくってくれた、これもテレビ放送テープであったんですが、「**事件報道に奪われた妻**」という形で、報道記者として悔悟の念を持って、反省の意味を持ってつくったテープであります。このメディアのために僕は妻を、僕の手元に骨を持つことすらできない。だから、僕は葬式を出すことができない。だから、ちゃんとした人並みのことを、僕は妻にしてやってないんですよ、いまだに。ほったらかしです。ちゃんと僕の手で

葬ってやりたい、といって、僕が葬ってやることはできないんです、やりたいんですが、できないんです。僕が殺すような形になるからですね。そこで僕は今悩んでおります。誰がこんなことをしたのか、殺したのは犯人だ。でも、僕に遺骨を僕のもとに戻してくれる、その段階さえも奪ったのはメディアなんです。だから僕は事件を2つ背負っているような形で、この宙ぶらりんな状態なんです。だからメディアにとっても僕は腹を立ててるんですが、腹を立てても仕方ないからじっとしていますけれども。ここの中に、**報道は何のために、誰のためにあるんだろうか**ということですね。小林君は一生懸命考えて、誰のためにこの報道はあったのか、報道は何のために報道するんだろうか、このことを彼は一生懸命考えて、先生、申しわけなかったなと、やっぱり報道というのは行き過ぎてるところがあったなあと、反省の意味を込めて、だからちょっと、少しOHKさんには、ああそうか、本当はいい人だっというような感覚で、ちょっとそこらはやっぱり、こういうふうなところで、僕はまた孤立していきました。妻を何とかしてやりたかったということ。とても残念です。すみませんでした。これが報道の被害なんです。

その、人権なんですけれども、生きていくというのは最低限これは保障されています。生きていくから人間であって、死んでしまえば、もう人間ではないですから、生きていく生存権っていうのが、もう一番根本的に保障されることです。根本です。犯人は、これを知らないですね。

次に、メディアは表現の自由とか報道の自由だとかということで、犯人を自殺に追いやりました。こういうことがあっていいんだろうか。表現の自由とか、報道の自由ばかりをメディアはすごく振りまわして、結局僕みたいな人物をつくってしまいました。僕の幸福を追求する権利を奪ってしまいました。憲法12条にちゃんと書いてあるんですね。公共の福祉のために権利を利用しなさい、権利を利用するなら責任をとりなさい、と書いてあるんですね。メディアの方たくさん見に来られてるけれども、もう一度反省を促したいです。

僕はさらにこんなことでも傷ついたんですね。**被害者だけが素人**です。こ

れはある交通事故死の方がおっしゃられてたんですけど、ああ、そうだよ。被害者だけ素人って、どういうところでしょう。僕はこんなところでも傷つけられた。僕が傷つけられたその例なんです。

事件の次の次の年だったかな、衆議院選挙がありました。衆議院選挙があったときに、「高橋妙子さん来てください」、いわゆる選挙権が、選挙の投票の用紙が来ました。ああ、そうか、まだ認めてくれているんだ、高橋妙子はまだ生きてるんだって、そのとき思ってたんです。しかし、その10月に国勢調査がありました。国勢調査のときに、「高橋妙子さんはいないんだから書かなくていい」、もうそこでは消されてしまったんです。え、何で、高橋妙子はいないんです、ほんまや、いないのに書かなくていいですよって。僕は何も言えなかった。そうしたら、次の年が明けて、津山市長選挙があって、また来るんですよ、「高橋妙子さん選挙に来なさい」って。これどうなってるの、ちょっと一貫してよって。僕ここで、それはいろいろ事務の処理とかあるんでしょうけれども、僕は逆なでされた気持ちでおりました。生きてるの、死んでるのって、本当にもうちょっと公的な形でちゃんとしてよって腹が立ちました。

それからもう一つ、健康保険、社会保険。例の社会保険審査の方がまだ来てるんですが、この社会保険料は天引きですから取られる。ちょっと待ってよ、入ってないって、国勢調査のときに言われたんだから、こんなことするのはおかしいじゃないと言ったら、いや、「あなたの奥さんは死んでるとは限らない」、ねえ、それはそうだ、でもちょっとおかしいじゃない、警察がダムの底まで探してるのに、僕ちゃんここでガチャガチャやったんですよ、まあ余り言うてもしかたないから、そうか。またここで悩む、おかしい。津山市から国民年金取られる、介護保険料取ってるからですね、ちょっと待って、高橋妙子はいないんだからちょっとおかしいじゃない、何とかいい方法があるんじゃないのか、出てきたらちゃんと払うから、それまで出てこなかったら停止してくれる方法はないか、高橋妙子さん生きてるかどうかわからん、妻は死んでるかかわからん、ああ、そうですね、おかしいことばかり。あと

この職権削除、この4文字。職権削除という4文字が書いてある。これは、職権をもって要するに高橋妙子は津山市民にはいないということが、職権をもってできるんです。そしたら、こういうふうなこと、こんなことをしなくて、逆撫でされなくて済む。でも、どこかにいるかもしれないけれど、津山市民ではないということが出来る。僕これ知ったもんだから、これは市民課の方へ行って、職権削除という言葉があるらしいですが、これ教えていただけるって。ああ、ありますよって簡単に言うんですよ。だったら、僕がこんなにごちゃごちゃごちゃごちゃしなくってもいいじゃあない、最初から言ってよ。ちょっと待ってください、2カ月間市役所のあそこへ張り出さにかいけん。もしおられたら、出てきたらその職権削除にならないから、2カ月間待ってください。出てみましたら、A4の紙に何枚も重ねてあるんですね、行方不明者の方が。あれ、こうやって探したってわからない。そういうふうなことも教えてくれない、知ってるのに教えてくれない、僕もそこでまた腹が立った。だんだんだんだん、僕は素人だ、知ってるのに教えてくれない、公僕というのはどういうことだ、どこにいったかと思って。そんなことまでも思って、家ももう嫌になっちゃって、家と土地を売却しよう。で、法務局へ行ったんです。僕の名前と女房の名前と一緒になってるもんですから、奥さんの実印もらってきてくれて、実印もらえるんなら家売らない、そこでいちゃもんつけたんです。そういうことになって、もう僕全部わからない、あっちゃこっちみんなもう痛めつけられた、こういうふうなことが1回だけではなくて、何回もあり、いつも悩みましたし、もう逆なでされました。本当に公僕というのはどこにいったの、ということをつくづく感じました。すみませんでした。

で、もう一度お願いしたいことなんですが、とにかく当たり前のことなんですが、**亡くなった命は帰ってこないんだとつくづく感じております**。そして、こんな話のない社会、住みやすい社会、安心、安全な、そういったまちをつくるためには、やっぱり思いやりの、**お互い相手を思いやってみたら、いじめもないでしょうし、人を殺すなんてとんでもない、できない、最近の**